認知症医療介護推進会議　第1回技術革新ワーキンググループ
議事次第

日　時：平成29年10月23日（月）
13:00～15:00
場　所：ステーションコンファレンス東京
４階402

１．開　会

２．議　事

当事者および家族からみた必要な技術革新の課題について

３．閉　会

【配布資料】
○　各委員から提出していただいた資料

平成２９年１０月

認知症の本人からの提案

～どこで暮らしていても、尊厳と希望をもってよりよく暮らしていけるために～

一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ（ＪＤＷＧ）

１．本人がよりよく暮らしていく可能性を伸ばす技術革新を

○　これまでは、認知症に関連して生じる問題に対処するための機器開発が中心でしたが、これからは発想を変えて、私たち本人が「よりよく暮らしていく」可能性を伸ばすための技術開発を重点的に進めてほしいです。

○　技術革新を通じて、社会に根強く残っている認知症をめぐる偏見が解消され、認知症があっても職場や地域社会で活躍できたり、地域に自由に出かけて心豊かに暮らせる社会が実現することを期待しています。

２．本人が参画した技術開発を

○　何が必要で、どういうものだったら役立つのか、実際のことは認知症を体験している私たち本人にしかわかりません。

○　「こんなものがあったらいいなあ」、「こんなものがあると暮らしやすくなる」など、私たち仲間が集まるとたくさんのアイディアが出ています。

○　技術革新を進める上で、本人抜きで進めてしまわずに、企画段階から私たちをぜひ参加させて下さい。

○　なじみのない人から、いきなり、単発で、急がせられると、アイディアや意見を十分に出せません。信頼関係を築きながら本人と共に開発を進めるようなプロジェクトをたちあげてほしいです。

３．本人の視点に立って（自分事として）考える：権利を守る

○　すでに開発されているものの中には、目を背けたくなるような人間性を無視した機器や不安や混乱、絶望を招くような機器・ネーミングのものも少なくありません。

○　開発の企画段階から商品として売り出すまでのすべての段階で、関係者が本人の視点に立って考えてみる、自分だったらどうかと考えてみることを徹底してほしいです。

○　技術革新の研究・取組が、本人の権利を守っているかを、形式的ではなく、実質的に審査してほしいです。

4．あるものを活かして、より多くの人に

○　これまでにない新たな物を開発する技術革新も期待しますが、すでにあるものを認知症およびそうなりそうな人向けに技術革新することが非常に重要だと考えます(電話やICT車、住居など）。

○　すでにあるものを活かせれば、技術革新を通じて生み出されるものを利活用する人の層が格段に広がり、暮らしやすい社会の実現により早く近づくことができると思います。

＜日本認知症本人ワーキンググループについて＞

認知症の本人をメンバーとし、認知症の人と社会のために認知症の人自身が活動していく日本初の独立した組織として、平成26年10月14日に発足しました。海外で先駆的な活動を進めている各国の「認知症ワーキンググループ」と連携し、国内の認知症関連の諸団体と友好的な関係を築きながら、認知症とともによりよく暮らしていける地域社会を築いていくための提案や活動を行っています。

（平成29年9月29日、一般社団法人へと移行しました。）

問合せ先：一般社団法人　日本認知症本人ワーキンググループ　事務局

メール：contact@jdwg.org　ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ：http://www.jdwg.org

認知症医療介護推進会議：技術革新ワーキンググループ

議論すべき主な課題について　　2017.10.23

団体		課題と感じていること
国立長寿医療研究センター	研究所 柳澤所長	冒頭に明示されている「当事者および家族からみた技術革新の視点」を字義通り受け取れば、まずは、これらの方々のご希望やニーズを聴取し、それを開発者側に伝えるシステムの構築が必要と思われます。項目として挙げられている、ロボット、ICT、自動運転、創薬等は企業やアカデミアが目下注力する開発項目ですが、果たして、これらが上記の方々にどれだけ理解され、どれだけ必要とされているかは不明です。マッチングをどのように図るかがまずは大切と感じます。

ロボット・ICT、自動運転、創薬における技術革新において、課題となっていることや不足している分野等に関して（2017/10/17）

・介護の現場における基盤整備（通信インフラ、電子記録システム）が進んでいない。

・介護ロボットと人間の間の物理的インターフェースに関する研究が十分ではない（ロボットによって支えられることで、皮膚への過大な圧迫感や苦痛を感じることが多い）

・ロボット・ICT を使った評価手法の開発が今後、必要になってくる

・医療・介護で、スタンドアロンで使えるロボットは、まだ開発されていない。

・ロボット・ICT 開発の方向性が、明確には示されていない。

・電子情報系は特に規格設定が必要（そうしないと、電子カルテの轍を踏むことになる）

国立研究開発法人国立長寿医療研究センター
健康長寿支援ロボットセンター
近藤和泉

技術革新ワーキンググループ委員名簿

団体名	役職	委員名
一般社団法人　日本認知症学会	理事長	秋山　治彦
国立研究開発法人　国立長寿医療研究センター	もの忘れセンター長	櫻井　孝
公益社団法人　認知症の人と家族の会	代表理事	鈴木　森夫
一般社団法人　日本慢性期医療協会	会長	武久　洋三
国立研究開発法人　国立長寿医療研究センター	理事長	鳥羽　研二
国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター	理事長	水澤　英洋
国際医療福祉大学大学院	教授	渡辺　俊介